

平成28年度 弘前大学グローバル人材育成事業 学生海外PBLプログラム 報告書

申請者 (代表者)	所属部局・職名	農学生命科学部・准教授
	氏名	石塚 哉史
事業名	食と農のグローバル化対応人材育成プログラム	
事業の概要とその成果		
<p>【派遣者(引率教員, 参加学生)】 引率教員 石塚 哉史(農学生命科学部准教授)、松崎 正敏(農学生命科学部教授) 参加学生 農学生命科学部園芸農学科3年 5名</p> <p>【実施期間】 平成28年9月 6日～平成28年 9月14日</p> <p>【事業概要とその成果】 (1)事業概要 本事業では、①訪中以前に参加者が主体となり、日中間の農産物・食品貿易(特に中国産農産物・食品の輸入)、日系食品企業の中国進出に関する文献の輪読、統計資料の整理を行い、知識の習得と中国への理解を向上させた。②青島農業大学に所属する学生・教員と本学参加者の共同参画による日中間における農林水産業・食品の生産・流通・消費の在り方についてワークショップを開催した。③日系資本を導入した大規模農場である山東朝日緑源農業高新技术有限公司及び山東朝日緑源乳業有限公司(両社共にアサヒグループホールディングスの系列企業)等において農業研修を実施した。④日本向けの中国産食品の開発輸入に取り組む山東日龍食品有限公司(日本ハムの系列企業)及び萊陽花樂町有限公司(カゴメの提携企業)において視察研修を実施した。⑤前出、①～④の内容を帰国後、学生主体で取り纏め、報告書作成及び学園祭時の保護者懇談会において公開帰国報告会を実施した、という5点を中心に取り組んだ。</p> (2)成果 本事業を実施したことにより、①参加した学生による中国に対する興味・関心が高まり、国際的な視野の拡大という点、②海外における食と農の現場を目の当たりにしたことに伴い、グローバル体制下における日本国内の農業・食品産業の持続的発展に対する意識の醸成につながった点、の2点が成果として指摘できる。とりわけ、一般的に受動的な言動が多く見受けられる本学の学生が、他国の学生等との交流等に対して能動的に活動した点は評価に値するものと考えられる。以上のことから、本事業の実施により、今後急速に進展していくであろう「食と農のグローバル化」や「中国産農産物・加工食品と国産品との貿易摩擦」という事象に対して、弘前市及び津軽地域で生産される農産物、加工食品がどのように対抗していくのかという点を思考する契機となり、地域農業の存立条件と持続的発展を検討する絶好の機会となった。最近では参加学生による関連業種への就職を希望する学生が増え、インターン等に積極的な姿勢を示しており、農業・食品関連産業の国際化対応を担う人材育成プログラムとして一定程度の役割を果たしているといえよう。		